

## Topics on Real Enumerative Geometry

石川 剛 郎 (Goo ISHIKAWA)

奈良女子大・理

複素領域上の幾何学と異なり、実領域上の幾何学では、  
いわゆる“教え上げ”は、一般にきれいな形をとらない。  
それは典型的に、一変数多項式の零点を求める問題に象徴さ  
れる。しかし、Sturm の定理があり、Mapping degree の理論が  
あり、いまだ説明はされていないが、“実教え上げ幾何”と呼  
ぶべきものが成立すると思われるふしがある。こんなことを  
[5] を読みながら考えた。ここでは、“実教え上げ幾何”  
を形成するとき参考になるような topics を集めてみた。

§1. Legendre 変換の特異点を数える。

$S_{\mathbb{R}} \subset \mathbb{R}P^n$  を “generic” な algebraic hypersurface of deg  $d$   
とする。ここでは generic ということを定義しないが、hypersurfaces  
全体の空間の中で proper algebraic set をのぞいたところで以下  
のことが成立する。

$$PT^*\mathbb{R}P^n = \{ \text{tangent hyperplanes of } \mathbb{R}P^n \},$$

とあくと、よく知られているように  $PT^*\mathbb{R}P^n$  には自然に contact

structure が入る. 図式

$$\begin{array}{ccc} PT^*\mathbb{R}P^n & \xrightarrow{\varphi} & \mathbb{R}P^{n\vee} \\ j \nearrow & \downarrow \pi & \\ S_{\mathbb{R}} \subset \mathbb{R}P^n & & \end{array}$$

を考える. ここで  $\pi$  は projection,  $\varphi$  は各 tangent hyperplane に対し対応する  $\mathbb{R}P^n$  の hyperplane を対応させる写像,  $j$  は,  $S_{\mathbb{R}}$  の各点に, その点の  $S_{\mathbb{R}}$  の tangent space を対応させる写像である. すると,  $\pi, \varphi$  は Legendre fibration,  $j$  は Legendre immersion となる.  $\varphi \circ j(S_{\mathbb{R}}) = S_{\mathbb{R}}^{\vee}$  は  $S_{\mathbb{R}}$  の dual あるいは Legendre 変換とよばれる. そこで, Legendre 変換の特異性は, Legendre map  $\varphi \circ j$  の特異性としてとらえられる. たとえば次のような評価を得る:

$$\begin{aligned} n=1: \quad \# \text{cusps of } S_{\mathbb{R}}^{\vee} &\leq 3d(d-2) \\ &\equiv d \pmod{2} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} n=2: \quad \# \text{swallow tails of } S_{\mathbb{R}}^{\vee} &\leq 2d(d-2)(11d-24) \\ &\equiv 0 \pmod{2}. \end{aligned}$$

(cf. [6], [1]). このような結果は, 古典的な Plücker 公式と結びつく. また Legendre cobordisms と結びつく. Thom 多項式の具体的な応用とも考えられる.

§2. 実代数関数の特異点を数える.

一般に  $X, Y$  を real algebraic manifold とし,  $A \subset X \times Y$  を subvariety, すなわち, real algebraic correspondence とする.  $A$  を generic としたとき, 図式

$$\begin{array}{ccc} A & \xrightarrow{\varphi} & Y \\ \pi \downarrow & & \\ X & & \end{array}$$

の特異性を調べたい. このとき, 次の様な best possible な評価を得る.

$$(1) \quad X = Y = \mathbb{P}^1 \quad A \subset \mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1 \quad \deg A = (d, r)$$

$$\begin{cases} s(\varphi_{\mathbb{R}}) \leq 2(d-1)r \\ s(\pi_{\mathbb{R}}) \leq 2d(r-1) \end{cases},$$

ここで,  $s(\cdot)$  は critical points の個数を表わす.

$$(2) \quad X = \mathbb{P}^2, Y = \mathbb{P}^1 \quad A \subset \mathbb{P}^2 \times \mathbb{P}^1 \quad \deg A = (d, r)$$

$$\begin{cases} s(\varphi_{\mathbb{R}}) \leq 3(d-1)^2 r \\ \kappa(\pi_{\mathbb{R}}) \leq 3d^2(r-2) \end{cases}$$

ここで,  $\kappa(\cdot)$  は cusps の個数.

$$(3) \quad X = \mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, Y = \mathbb{P}^1 \quad A \subset \mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, \deg A = (d, e, r)$$

$$\begin{cases} s(\varphi_{\mathbb{R}}) \leq (6de - 4d - 4e + 4)r \\ \kappa(\pi_{\mathbb{R}}) \leq 6de(r-2) \end{cases}$$

これらの結果は Hilbert 第16問題の一般化としてとらえ

ることが出来る。また、この問題でも Thom 多項式の具体的な応用が重要になる。

### §3. Hilbert 第16問題の前半 (一般論の主要部)

この問題については、あまり知られていないので、とりわけ重要な結果を挙げておく。

$X$  を 実代数多様体 i.e.  $(X, \tau)$ ,  $X$ : compact 複素多様体,  $\tau: X \rightarrow X$  conjugation が与えられ、埋め込み  $e: X \hookrightarrow \mathbb{P}^N$  で  $e \circ \tau = \text{conj} \circ e$  となるものが存在するとする。ここで conjugation とは anti-holomorphic な involution のことである。また  $\text{conj}: \mathbb{P}^N \rightarrow \mathbb{P}^N$  は、複素共役から定義される conjugation を表わす。

$\mathbb{R}X = X_{\mathbb{R}} = X^{\tau} = \{x \in X \mid \tau(x) = x\}$ ,  $X_{\tau} = X/\tau$   
 とおくと,  $X^{\tau}$  は  $C^{\infty}$  submanifold,  $\dim_{\mathbb{R}} X^{\tau} = \dim_{\mathbb{C}} X$ , (又は  $X \cong \emptyset$ ).  
 $\dim X = 1$  ならば  $X_{\tau}$  は境界付"実曲面",  $\dim X = 2$  ならば  
 $X_{\tau}$  は closed 4-mfld, 一般に  $X_{\tau}$  は orbifold となる。

$$P_t(X, K) = \sum_i \dim H_i(X; K) t^i \quad (K: \text{体})$$

$$\chi(X) = P_{-1}(X; K) \quad (\text{Euler 標数})$$

とおく。  $X^{\tau}$  のベッチ数の評価が次のように得られる。

Theorem (Harnack-Thom)

$$P_i(X^{\tau}; \mathbb{Z}/2) \leq P_i(X; \mathbb{Z}/2)$$

(等号成立のとき,  $(X, \tau)$  を M-多様体 とする)

Theorem. (Petrowskii - Oleinik - Kharlamov)  $\dim_{\mathbb{C}} X = 2n$  のとき,  
 $|\chi(X^{\tau}) - 1| \leq h^{n,n}(X) - 1$

ここで,  $h^{n,n}(X) = \dim_{\mathbb{C}} \{ \text{harmonic } (n,n)\text{-forms} \}$ .

さらに, M-多様体の重要な性質として

$$(1) \quad \tau_*: H_k(X; \mathbb{Z}/2) \rightarrow H_k(X; \mathbb{Z}/2), \quad \tau_* = \text{id}$$

$$(2) \quad \chi(X^{\tau}) \equiv \sigma(X) \pmod{16}$$

ここで  $\sigma(X)$  は  $X$  の signature である.

M-多様体の典型的なものは,  $(\mathbb{P}^n, \text{conj})$  である.

M-curve に対し,  $X^{\tau} \cong S^1 \amalg \dots \amalg S^1$  ( $g(X)+1$ ),



となる.  $X$  が M-surface のとき,  $X^{\tau} \cong S^1$  となるか, というのは, 大きな問題に思える. この方面での未解決問題としては

他に, Ragsdale - Viro 予想 「 $X$ : 1-connected,  $\dim X = 2 \Rightarrow$

$\dim H_1(X^{\tau}; \mathbb{Z}/2) \leq h^{1,1}(X)$ 」 がある.

#### §4. 実代数関数の特異点を数える. (つぎ)

いま, M-多様体の構成問題を取りあげてみる.  $X^1 \subset \mathbb{P}^2$

$\deg X = d$  に対しては Harnack (1876),  $X^2 \subset \mathbb{P}^3$ ,  $\deg X = d$  に対し

ては, Viro (1979) が示した.  $X^1 \subset \mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ ,  $\deg X = (d, r)$  に対しては答

易である。  $X^2 \subset \mathbb{P}^2 \times \mathbb{P}^1$  に関しては次に述べることにより構成される。

いま,  $A \subset \mathbb{P}^2 \times \mathbb{P}^1$ ,  $\deg A = (d, r)$  に対し, 次数  $(d, r)$  を制限したとき,  $A$  の種々の不変量がどんな制約を受けるか? ということをとりあける。図式

$$\begin{array}{ccc} A & \xrightarrow{\varphi} & \mathbb{P}^1 \\ \pi \downarrow & & \\ \mathbb{P}^2 & & \end{array}$$

について,  $A$  は平面曲線族  $\{\pi\varphi^{-1}(L) \cdot \mu\} \{L, \mu\} \in \mathbb{P}^1$  と思える。このとき  $\varphi$  の (real) crit. pt. = curve の (real) sing. pt.,  $\pi$  の (real) cusp pt. = envelope の (real) cusp pt. が成立する。

Theorem  $A \subset \mathbb{P}^2 \times \mathbb{P}^1$ ,  $\deg A = (d, r)$ , 一般の位置,  $\mathbb{R}$  上 def. に対し 次の best possible な一様評価がある;

$$\begin{cases} P_1(\mathbb{R}A; \mathbb{P}/2) \leq 3 + d^2 + 3(d-1)^2(r-1) & (r \geq 1) \\ \Delta(\mathbb{R}\varphi) \leq 3(d-1)^2 r & (r \geq 1) \\ \kappa(\mathbb{R}\pi) \leq 3d^2(r-2) & (r \geq 2) \end{cases}$$

一般に,  $A \subset X \times \mathbb{P}^1$  を,  $X$  上の line bundle  $L$  に対し,  $P^*L \otimes P_2^*(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(r))$  の "transverse" な section の零点集合とするとき,

$$\begin{cases} P_1(\mathbb{R}A; \mathbb{P}/2) \leq P_1(A; \mathbb{P}/2) = (3r-2)C_1(L)^2 - (2r-2)C_1(L)C_1(TX) + rC_2(TX) \\ \Delta(\mathbb{R}\varphi) \leq \Delta(\varphi) = r(3C_1(L)^2 - 2C_1(L)C_1(TX) + C_2(TX)) \\ \kappa(\mathbb{R}\pi) \leq \kappa(\pi) = 3(r-2)C_1(L)^2 \end{cases}$$

が成立する。ここで  $c_i(\cdot)$  は Chern class.

この計算は Thom 多項式の具体的な適用に F 裡得られる.

§5 Thom 多項式を使って数える.

$\Sigma \subset J^k(n, p)$  を座標変換で不変な algebraic set とする.

$f: X \rightarrow Y$  に対し,  $j^k f: X \rightarrow J^k(X, Y) \supset \Sigma(X, Y)$  を考え,

$\Sigma f = j^k f^{-1}(\Sigma(X, Y))$  とおく. このとき,  $j^k f$  が  $\Sigma$  に transverse なら

ば,  $\Sigma f$  の Poincaré dual in  $X = P(c(TX), f^*c(TY))$  と書ける.

ここで重要なのは多項式  $P$  が  $\Sigma$  にのみ F することである. 多項式

$P$  を Thom 多項式 と F ぶ.

Thom 多項式の具体的な応用は, 次の F うな Process を通い

て行なう.  $X$  を  $P^{n_1} \times \dots \times P^{n_s}$  の submanifold とし,  $f: X \rightarrow Y$

で, 簡単のため  $\text{codim } \Sigma = \dim X$  とする. このとき  $j^k f$  が  $\Sigma$

ならば  $\Sigma f$  は有限集合である;

$$\# \Sigma f = \langle 1, [\Sigma f] \rangle = \langle P, [X] \rangle.$$

多くの問題では,  $P = i^* \alpha$ ,  $\alpha \in H^*(P^{n_1} \times \dots \times P^{n_s})$ ,  $i: X \hookrightarrow$

$P^{n_1} \times \dots \times P^{n_s}$  と表わすことが F える.  $i^*[X]$  の Poincaré dual を  $\beta$  と

おけば, したがって,

$$\# \Sigma f = \langle i^* \alpha, [X] \rangle = \langle \alpha, i_* [X] \rangle$$

$$= \langle \alpha \beta, [P^{n_1} \times \dots \times P^{n_s}] \rangle = \int_{P^{n_1} \times \dots \times P^{n_s}} \alpha \beta$$

Thom 多項式については, Postens, Ronga, Gaffney, Ando 等の仕事がある.

□

§6. Mapping degree を使って教える.

まず言及すべきは、代数方程式の解の分岐を、Mapping degree の言葉で記述する Fukuda, Aoki, Sumo, Nishimura 等の理論 (cf. [6]) である。それについては、他に解説があると思う。ここでは、Mapping degree を使って、generic singularity を perturb したとき得られる cusps を教える話 ([4]) をのぞく。

$f: \mathbb{R}^2, 0 \rightarrow \mathbb{R}^2, 0$  を "generic" な singularity とする。  $f$  を perturb することにより multi-stable な  $\tilde{f}: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^2$  をうる。もともと  $f$  は 0 以外では stable だから perturbation は 0 の十分小さな近傍上に support をもつことができるが、このとき、 $f$  の cusp (i.e.  $(x, y) \mapsto (x, y^3 + xy)$  at 0 と equivalent) の個数は、もともとの  $f$  からどのような制約を受けるだろうか？

Theorem ([4])  $f: \mathbb{R}^2, 0 \rightarrow \mathbb{R}^2, 0$  を generic な map-germ  $\tilde{f}: \tilde{D}^2 \rightarrow D_\delta^2$ , ( $\tilde{D}^2 = f^{-1}(D_\delta^2) \cap D_\varepsilon^2$ ;  $0 < \delta \ll \varepsilon \ll 1$ ) を  $f$  の stable な perturbation とする。このとき、

$$\kappa(\tilde{f}) \equiv 1 + \frac{1}{2}(\text{C}(f) \text{ の branch の個数}) + \deg f \pmod{2}.$$

ここで注意したいのは、 $\text{C}(f)$  は  $f$  の Jacobian determinant  $Jf: \mathbb{R}^2, 0 \rightarrow \mathbb{R}, 0$  の零点集合であり、その branch の個数は、前出の Fukuda Aoki-Sumo, Nishimura にて、やはり degree の言葉で記述できることである。



この考察は、図式

$$\begin{array}{ccc} \mathbb{R}^l, 0 & \xleftarrow{F} & \mathbb{R}^2 \times \mathbb{R} \times \mathbb{R}^{l-1}, 0 & \xrightarrow{P_2} & \mathbb{R}, 0 \\ & & \downarrow P_1 & & \\ & & \mathbb{R}^2, 0 & & \end{array}$$

に対しても適用できる。すなわち、 $F$  を defining equation と考  
え、variety  $A = F^{-1}(0) \subset \mathbb{R}^2 \times \mathbb{R} \times \mathbb{R}^{l-1}$  を考える。generic には、  
 $F$  は isol. sing. であり、 $\pi = P_1|_A : A \rightarrow \mathbb{R}^2$  は、0 以外で multi-  
stable となる。 $F$  を perturb して、 $\tilde{A} = \tilde{F}^{-1}(0)$  が non-singular  
 $\tilde{\pi} = P_1|_{\tilde{A}}$  が multi-stable とできる。また、perturbation の support は  
好きなだけ小さくとれる。 $\tilde{\pi} : M \rightarrow D_\varepsilon^2$  ;  $M = D_\varepsilon^{2+l} \cap \tilde{\pi}^{-1}(D_\varepsilon^2)$   
に対し次が成立する。

$$k(\tilde{\pi}) \stackrel{(2)}{=} \#(\text{comp. of } \partial M) + \frac{1}{2} \#(\text{branches of } C(\tilde{\pi})) + \deg \tilde{\pi}.$$

先の場合、 $M \cong D^2$  である。

証明は、Quine [8] の結果による。(この拡張は、宇屋周一氏  
により示唆された)

§7  $Q(f)$  を使って数える。

Eisenbud-Levine [5] の定理が出発点である。

$$f : \mathbb{R}^n, 0 \rightarrow \mathbb{R}^n, 0 \quad C^\infty \text{ map-germ}, \quad Q(f) = \mathbb{E}_n / \langle f_1, \dots, f_n \rangle$$

とおく。  $\dim_{\mathbb{R}} Q(f) < +\infty$  のとき、

$$|\deg f| = \dim_{\mathbb{R}} Q(f) - 2 \dim_{\mathbb{R}} I.$$

ここで、 $I$  は  $I^2 = 0$  を満たす  $Q(f)$  の ideal のうち最大のもの。

これは、 $\deg f = \text{sign} \langle, \rangle_\varphi$  という記述から導かれる

よ. ここで,  $\langle, \rangle_\varphi: Q(f) \times Q(f) \rightarrow \mathbb{R}$  は, functional  $\varphi: Q(f) \rightarrow \mathbb{R}$   
 $\varphi(h) > 0$  なるものに対し,  $\langle h, k \rangle_\varphi = \langle hk \rangle_\varphi$  により定義される  
 signature  $\langle, \rangle_\varphi$  は  $\varphi$  に依存しない.

Mapping degree により記述される invariants は, したがって, 種々の  
 $f$  の algebra  $Q(f)$  に  $f$  により記述される.

最後に福田拓生氏による問題を挙げておく.

「 $f: \mathbb{R}^n, 0 \rightarrow \mathbb{R}^p, 0$  の topological invariants を  $Q(f)$  から絞り  
 出せ」

以上

## References

- [1] V.I. Arnol'd, Singularities of systems of rays, Russ. Math. Surveys 38-2(1983), 87-176.
- [2] D. Eisenbud, H.I. Levine, An algebraic formula for the degree of a  $C^\infty$  map-germ, Ann. of Math., 106(1977), 19-38.
- [3] T. Fukuda, Local topological properties of differentiable mappings II, Tokyo J. of Math., 8-2(1985), 501-520.
- [4] T. Fukuda, G. Ishikawa, On the number of cusps of stable perturbations of a plane-to-plane singularity, preprint.
- [5] S.L. Kleiman, The enumerative theory of singularities, in Real and Complex Singularities, ed. by P. Holm, Sijthoff & Noordhoff International Publishers, 1977.
- [6] V.S. Kulikov, the calculation of the singularities of the embedding of a generic algebraic surface in the projective space  $\mathbb{P}^3$ , Funct. Anal. Appl., 17(1983), 176-186.
- [7] T. Nishimura, T. Fukuda, K. Aoki, An algebraic formula for the topological types of one parameter bifurcation diagrams,
- [8] J.R. Quine, A global theorem for singularities of maps between oriented 2-manifolds, Trans. Amer. Math. Soc., 236(1978), 307-314.